

エンゲージド・ブッディズムの定義と日本語訳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大來, 尚順 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1647

エンゲージド・ブッディズムの 定義と日本語訳

武蔵野大学 仏教文化研究所 研究員
財団法人 仏教伝道協会 職員

大來 尚順

<序章>

Engaged Buddhism (以下、「エンゲージド・ブッディズム」という言葉は、日本では「行動する仏教」、「社会をつくる仏教」、「社会参加仏教」、「闘う仏教」などとさまざま解釈がされているが、もともとはベトナム僧 Thich Nhat Hanh (以下、ティック・ナット・ハーン)によって作られた言葉である。もともと、英語の「engage」という言葉はフランス語の「アンガージュマン」という「政治に積極的に参加する」という意味である。よって、西洋でも仏教が政治、経済、環境など様々な視点を通して、社会に何かしらの関係を持つこととして「エンゲージド・ブッディズム」が解釈される。

ティック・ナット・ハーンとは1960年代のベトナム戦争下で非戦を主張し、フランスへの亡命を余儀なくされた人物である。現在は、北米・欧州・アジアと世界を周りながら布教活動、平和活動に尽力している。

今日、この「エンゲージド・ブッディズム」は、仏教による社会

活動または運動を生み出す概念に名付けられており、この概念を基に生きる人々や活動が世界中に多く見られる¹。しかし、これらの「エンゲージド・ブッディズム」の解釈は、「各仏教諸宗派や活動・運動内容の違い」により様々である²。例えば、大乘仏教と上座部仏教の「エンゲージド・ブッディズム」の解釈の違いは著しい。さらにいうならば、アジア仏教と西洋仏教との間では、「エンゲージド・ブッディズム」という概念が作用する内容自体が異なる。アジア仏教と西洋仏教の「エンゲージド・ブッディズム」の解釈の違いは、いかに「実生活」に関わるかにある。アジア仏教における「エンゲージド・ブッディズム」は、人権、社会倫理、というような具体的な実生活レベルに密接に関与している。一方、西洋ではアイデンティティの問題に関与している³。

しかし、このような様々な「エンゲージド・ブッディズム」の解釈の中にも共通性が見られる。この共通性とは、僧侶と仏教徒が一緒になって様々な社会問題に取り組んでいくことにある。この真髄には、「仏教の中心をなす自己内省という教えを、生活の中に混在する苦に対応できるように具現化していくこと」である⁴。

今日、西洋における「エンゲージド・ブッディズム」の研究においては、「伝統的解釈」と「モダンの解釈」の2つに分かれている。しかし、この2つの解釈は、自己を正当化することに固執するあまり、「苦の原因を深く観る」瞑想的行の概念を考慮することなく研究を進めている。よって、両解釈の研究者は仏教活動・運動と社会との関わりばかりを強調するばかりに、「エンゲージド・ブッディズム」イコール「社会運動」というレッテルを作り出している。つまり、なぜ「エンゲージド・ブッディズム」の概念が仏教でなければならないのか明らかではない。これでは、実際にこの概念を具現化したとき、社会に混在する苦の解決はもとより、逆に新たな苦を

作り出す危険性があるのではないだろうか。

事実、ティック・ナット・ハーン自身、様々な表現で「エンゲージド・ブッディズム」の定義をするが、曖昧なものも多く誤解も生じやすい。よって、本論文では、ティック・ナット・ハーンの思想に立ち返り、西洋におけるさまざまな「エンゲージド・ブッディズム」の解釈と比較し、未だ定着しない「エンゲージド・ブッディズム」の定義と日本語訳を西洋の研究の視点から「仏教の再生」と解釈したい。

第一章 ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブッディズム」の発展の背景

ティック・ナット・ハーンは、臨済禅のベトナム僧で、1966年にベトナム戦争に対して反戦運動をしたとしてベトナムから追放されフランスへ亡命した人物である⁵。しかし、亡命を機に、ティック・ナット・ハーンは欧州と北米を中心に仏教平和活動を展開していった⁶。

ティック・ナット・ハーンと「エンゲージド・ブッディズム」の発展関係の背景には、ベトナム戦争時代がある。この時代によってもたらされた数多くある結果の一つは、ベトナム仏教はゴ・ディン・ジェム (Ngo Dinh Diem) 政権と南ベトナムカトリック権力主義者の「ベトナムの経済的独り立ちの可能性を破壊する」横暴の下で苦しめられたということである⁷。情報も何もかもがコントロールされる中、ベトナム民の苦しみを世界中に露呈したのが、1963年6月11日に起こったベトナム僧ティック・クアン・ドック (Thich Quang Duc) の焼身自殺である。ティック・クアン・ドックに続き、36人の仏教僧侶と信仰者がベトナム平和を願って焼身自殺した⁸。

しかし、このような状況の中、ティック・ナット・ハーンが目を向けていた批判先は、ゴ・ディン・ジェム政権や南ベトナムカトリック権力主義者ではなく、ベトナム仏教徒に対してであった。ティック・ナット・ハーンは、ベトナム仏教は継続されてきた伝統階級制度に依存しており、仏教の中心的目的である「苦からの解放」への視点が十分ではなかったことを指摘している⁹。ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブッディズム」の概念は、このような現実に対する問題意識から生まれた¹⁰。

第二章 ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブッディズム」

ティック・ナット・ハーンによれば、彼は1950年代に「エンゲージド・ブッディズム」について思考し始めたようだ。そして、1964年に「Engaged Buddhism」というタイトルで本を出版した。また同時期に書いた「The Basic Ideal of Buddhist Youth for Social Service」というエッセイでは、戦争と社会悪の時代に仏教理念をどのように反映させていくのかということについて言及している¹¹。ここでは、「仏教理念をどう現実（の苦しみ）に具体的に反映させるか」ということがティック・ナット・ハーンのいう「エンゲージド・ブッディズム」の概念のキーポイントになっている。また彼は「エンゲージド・ブッディズム」の原型は「私たちの個人の行における自己保護と自己治癒を説く仏の教え」と「その経験を世界や（他の人へも）弘めること」であるという¹²。この原型の根底には、自己中心性の姿勢から自己に囚われない姿勢への変革という「自己内省」の過程が腰を据えている。これはティック・ナット・ハーンの次のような言葉からも読み取れる。

私は幼少の頃より、人々（特に農家の方々）の実生活を改善する為にも仏の教えに生き、行じたいと強く思っていた。私を含め、多くの僧侶がこのような思いをもって仏道を歩んだ。（その結果、）私たちにあって、「エンゲージド・ブッディズム」という名の「慈悲心をもった正道」の活動こそが応えだった¹³。

「エンゲージド・ブッディズム」は、ただ社会問題と政治問題の解決、反戦運動や社会的不平等への抗議に仏教を「盾にして」使うという意味ではない。まず、私たち自身が仏の教えを「生き方」に取り込まなければならない¹⁴。

ティック・ナット・ハーンは自己の煩悩を翻しそれから生まれる慈悲心の仏道の大切さを述べている。この「自己内省」とは、「自己の煩悩を翻す」ことを意味するが、これには自己の煩悩を翻すことで生まれてくる慈悲の心も含まれる。この過程を通して様々な社会活動が生み出される。つまり、これが「エンゲージド・ブッディズム」の核となる¹⁵。言い換えれば、仏教による社会活動には、この「自己内省」の過程が重要となると考えられる。

さらに、ティック・ナット・ハーンは「仏教を『盾にして』」社会活動をしてはならないと述べている。これは、もし「自己内省」という過程が十分でなければ、かえって社会活動を通して新たな暴力や苦しみが生まれてしまう危険性もあるということを示唆している。

ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブッディズム」において、「私自身」の目覚めこそがその原型であると理解した。この自己内省的過程を通して自己と他者の境界を霞ませるような、皆の幸せを願う慈悲心が生まれ、その心が具現化され実生活の問題に

対応して様々な仏教による社会活動が生まれてくるのである¹⁶。

第三章 今日の西洋における「エンゲージド・ブッディズム」の研究

今日、西洋において「エンゲージド・ブッディズム」の概念の研究は、「伝統的解釈」と「モダンの解釈」の2つの解釈に分かれる。伝統的解釈者は、「エンゲージド・ブッディズム」という概念は仏教の過去の歴史から継承されてきたものだとし主張し、モダンの解釈者は、過去にはない「新しい」概念として解釈する¹⁷。では、どのような解釈なのか考察してみたい。

第三章 第一節 伝統的解釈者

この部類に認識される研究者は、仏教の社会的役割の歴史の中から、仏教と社会との関わりを見つけ、それで「エンゲージド・ブッディズム」という概念の歴史的継続性の裏付けをする。しかし、彼らは社会と仏教の接点、つまり仏教の社会性に注目するだけで、その内容を問おうとしない傾向がある。もし仏教の社会性だけに焦点を置けば、過去における戦争協力や差別肯定に関する活動までも仏教社会的貢献として見なされてしまうのではないだろうか¹⁸。

ここで生じる疑問は、なぜティック・ナット・ハーンは自分の概念をまとめた「エンゲージド・ブッディズム」という言葉を作らなければならなかったのかということである。もし、ただの仏教による社会活動を強調したいだけであるならば、歴史的に見ても仏教と社会の関わりは確かに存在し、わざわざ「エンゲージド・ブッディズム」という概念を作る必要はなかったのではないだろうか。ここには、ベトナムの歴史にみられる仏教による社会参加は彼の理想と

する仏教の社会性とは異なるということを明確にする意図があったのではないかと思われる。だとすれば、仏教と社会との関係を、内容を問うことなく肯定する伝統的解釈は、ティック・ナット・ハーンの意図とは異なることになるだろう。

第三章 第二節 モダンの解釈者

この解釈における研究者は、仏教と社会の歴史的関わりをまったく否定するかまたは、間接的にまたは潜在的にはその関わりを認めるという立場をとりながら、「エンゲージド・ブディズム」の概念は「新しい」ものであると主張する。Thomas Freeman Yarnall（コロンビア大学教授）は、この複雑なモダンの解釈者の議論を5つのポイントにまとめている¹⁹。

- ① 伝統仏教は社会的に従事していない。
- ② 今日の世界は、過去にはない社会的・政治的問題に直面している。
- ③ 今日の西洋社会政治理論はユニーク且つこれまでにない分析と解決を示す。
- ④ 伝統仏教が社会に対応するのは難しい。
- ⑤ 今日の西洋社会政治理論は仏教の潜在性を引き出し、仏教による社会参加（西洋仏教）という新たな合成物を作り出せる。

5つの議論のポイントから、モダンの解釈者も主に仏教の社会性に焦点を当て、「エンゲージド・ブディズム」は「新しい」概念であることの裏付けをしているように見える。この5つポイントにおいて、「新しい」という意味は、「伝統を問うていく」ということ

であろう。

一方、ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブディズム」の概念において、「新しい」というのは、仏の教えを持って生活を営むという自己内省の中で自然と生まれてくる行動の過程を意味する²⁰。よって、一見「伝統を問うていく」という意味は、ティック・ナット・ハーンのいう「エンゲージド・ブディズム」の概念と一致しているように見えるが、社会に従事していく主体が私たち自身ではなく、仏教となっており、自己を問う過程がないという点で大きく異なる。ティック・ナット・ハーンにとって、仏教に生きる「人間」が社会と携わっていくことが重要となるのではないだろうか。

第三章 第三節 伝統的解釈者とモダンの解釈者の共通する特徴

「エンゲージド・ブディズム」の概念の伝統的解釈とモダンの解釈には、共通の特徴がある。それは、双方とも社会改革に対する意識が強いように感じられることである。ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブディズム」の概念の中心は、私たち自身が仏の教えに生き、その中で直面する様々な問題に仏教の根本的行動である自己内省を通して取り組んでいくことである。しかし、両解釈は、「自己内省」にはあまり関心が向けられておらず、両解釈者の思想と仏教の繋がりが見えにくい²¹。言い換えれば、なぜ「エンゲージド・ブディズム」の概念が仏教でなければならないのかが説明されていないのである。

第四章 「エンゲージド・ブディズム」の定義と日本語訳

「エンゲージド・ブディズム」は仏教社会活動及び運動を生み

出す概念の言葉であり、その活動や運動の内容は一つひとつ異なる。それによって、西洋では「エンゲージド・ブuddiズム」はティック・ナット・ハーンの思想を通して、政治、経済、生態学など様々な視点から定義される。現在、「エンゲージド・ブuddiズム」とその対象となる問題の関係は、倫理、人権、非暴力、正義といった様々な分野へと拡がりを見せている。このような複雑な状況下、「エンゲージド・ブuddiズム」はどう一つに定義され日本語訳できるのだろうか。

ジェームズ・メディソン大学教授のSallie B. Kingは、「『エンゲージ・ブuddiズム』は場所や宗派の違いによって定義されるべきではなく、『他を思う関心』と『仏道の具現化』ということから定義されるべき」であるという²²。これは、ティック・ナット・ハーンの思想に精通し、また数多くある定義の中で一つの大きな支柱となる定義の可能性を示している。

「エンゲージド・ブuddiズム」の出発点は、「私たちは仏の教えに生きる者として他の者のために何ができるだろうか」(What Can I Do for You?)という問いと、「私たちは仏の教えの中でどう生きるのか」(How Do We Live within Buddha's Teachings?)という問いである。この問いという種から「エンゲージド・ブuddiズム」と呼ばれる活動や運動という芽が出てくるのではないだろうか。

「エンゲージド・ブuddiズム」とは、「自己内省」、「他者への関心」、「苦に対する適切な行動と運動」という一連の自然の流れを促進する概念である。この考え方に、ティック・ナット・ハーンが「エンゲージド・ブuddiズム」という概念の言葉をつくらなければならなかった理由を加えれば、「エンゲージド・ブuddiズム」は「仏教の再生」(REVITALIZING BUDDHISM)として解釈できないだろうか。未だ歴史と伝統に埋まっている「平和な社会」のための仏の

教えの潜在性は、「私自身」が様々な苦というものに信仰を持って向き合っていくことで発揮される。言い換えるならば、私たちは己の仏教の理解を反省し、己に「仏教を信仰する者として他者に何ができるか」ということを問い続けなければならないということだ。「仏教の再生」には「私」という主体性が必要であり、その「私」がこの現実と混在する苦に対し、己を問いたまたそれに応えていこうとする姿勢により、仏の教えに新たな活力が吹き込まれていくのではないだろうか。

結論

本論文では、ティック・ナット・ハーンの「エンゲージド・ブッディズム」という概念を、彼のベトナム戦争時の経験やそれに対する思いを中心に考察し、それは様々な生活の中に混在する苦に「私」が「自己内省」を通して向き合い、それに応じた行動が仏道の具現化として自然と生まれる一連の流れを促進するものと理解した。

しかし、現在「エンゲージド・ブッディズム」を第三者的立場から研究する西洋の研究者は、「伝統的解釈者」と「モダンの解釈者」に分かれている。彼らの研究は、自らの解釈の裏づけに固執するあまり、ティック・ナット・ハーン概念の中心となる「自己内省」にはあまり触れておらず、結果としてなぜ「エンゲージド・ブッディズム」という概念が仏教に基づいているのかという点が読み取りにくくなってしまっている。

これらのことを総体的に考慮し、「エンゲージド・ブッディズム」の再定義と日本語訳を試みれば、「仏教の再生」(REVITALIZING BUDDHISM)となるであろう。眠っている仏の教えを、「私たち自身」で呼び起こしその教えの意味は変えず、新たな活力を吹き込む

のだ。従って、教えはさらなる活力を得、私たちの実生活に反映し、それは時として小さな運動や大きな運動へと繋がるであろう。

参考文献

- Bell, Sandra. "A survey of Engaged Buddhism in Britain." In *Engaged Buddhism in the West*, ed. Christopher S. Queen, 397-422. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- Bond, George D. "A. T. Ariyaratne and the Sarvodaya Shramadana Movement in Sri Lanka." In *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia*, eds. Christopher S. Queen and Sallie B. King, 121-146. Albany: State University of New York Press, 1996.
- Bucknell, Roderick S. "Engaged Buddhism in Australia." In *Engaged Buddhism in the West*, ed. Christopher S. Queen, 468-481. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- Chappell, David W., ed. *Buddhist Peacework: Creating Cultures of Peace*. Boston: Wisdom Publications, 1999.
- Dalai Lama. "Dialogue on Religion and Peace." In *Buddhist Peacework: Creating Cultures of Peace*, ed. David W. Chappell, 189-197. Boston: Wisdom Publications, 1999.
- Do, Thien. "The Quest for Enlightenment and Cultural Identity: Buddhism in Contemporary Vietnam." In *Buddhism and Politics in Twentieth-Century Asia*, ed. Ian Harris, 254-276. London and New York: Continuum, 1999.
- Harris, Ian, ed. *Buddhism and Politics in Twentieth-Century Asia*. London and New York: Continuum, 1999.
- Huang, C. Julia. "The Buddhist Tzu-chi Foundation of Taiwan." In *Action*

- Dharma: New Studies in Engaged Buddhism*, eds. Christopher Queen, Charles Prebish and Damien Keown, 136-153. London: Routledge Curzon, 2003.
- Hunt-Perry, Patricia, and Lyn Fine. “All Buddhism Is Engaged: Thich Nhat Hanh and the Order of Interbeing.” In *Engaged Buddhism in the West*, ed. Christopher S. Queen, 35-66. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- Jones, Ken. *The New Social Face of Buddhism: A call to Action*. Boston: Wisdom Publications, 2003.
- King, Sallie B. *Being Benevolence: The Social Ethics of Engaged Buddhism*. Honolulu: University of Hawai ‘i Press, 2005.
- _____. “Thich Nhat Hanh and the Unified Buddhist Church of Vietnam: Nondualism in Action.” In *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia*, eds. Christopher S. Queen and Sallie B. King, 321-363. Albany: State University of New York Press, 1996.
- Kraft Kenneth. “Engaged Buddhism,” In *Engaged Buddhist Reader*. Arnold Kotler, et. al., eds., 64-69. Berkeley: Parallax Press, 1996.
- _____. *The Wheel of Engaged Buddhism: A New Map of the Path*. New York: Weatherhill, Inc., 1999.
- _____. “Wellsprings of Engaged Buddhism,” In *Not Turning Away: The Practice of Engaged Buddhism*. Susan Moon, 154-161. Boston, London: Shambhala, 2004.
- Litsch, Franz-Johannes. “Engaged Buddhism in German-Speaking Europe.” In *Engaged Buddhism in the West*, ed. Christopher S. Queen, 423-445. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- Nhat Hanh, Thich. *Creating True Peace: Ending Violence in Yourself, Your Family, Your Community, and the World*. New York: Free Press, 2003.
- _____. *Fragrant Palm Leaves: Journals 1962-1966*. Berkeley: Parallax Press,

- 1966.
- _____. *Being peace*. Berkeley: Parallax Press, 1987.
- _____. *Vietnam: Lotus in a Sea of Fire*. New York: Hill and Wang, Inc., 1967.
- Queen, Christopher S., ed. *Engaged Buddhism in the West*. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- _____. “Introduction: A New Buddhism.” In *Engaged Buddhism in the West*, ed. Christopher S. Queen, 1-31. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- Queen, Christopher S, Charles Prebish, and Damien Keown, eds. *Action Dharma: New Studies in Engaged Buddhism*. New York: RoutledgeCurzon, 2003.
- Queen, Christopher S and Sallie King, eds. *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movement in Asia*. Albany: State University of New York Press, 1996.
- Simmer-Brown, Judith. “Shambhala: ‘Enlightened Warriorship’ for Peace.” In *Buddhist Peacework: Creating Cultures of Peace*, ed. David W. Chappell, 113-120. Boston: Wisdom Publications, 1999.
- Sivaraksa, Sulak. *Seeds of Peace: A Buddhist Vision For Renewing Society*. Berkeley: Parallax Press, 1992.
- Snyder, Gary. “Buddhism and the Possibilities of a Planetary Culture,” In *Engaged Buddhist Reader*. Arnold Kotler, et. al., eds., 123-126. Berkeley: Parallax Press, 1996.
- Sponberg, Alan. “TBMSG: A Dhamma Revolution in Contemporary India.” In *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia*, eds. Christopher S. Queen and Sallie B. King, 73-120. Albany: State University of New York Press, 1996.

- Tanaka, Kenneth K and Eisho Nasu, eds. *Engaged Pure Land Buddhism: The Challenges Facing Jodo Shinshu in the Contemporary World*. Berkeley: WisdomOcean Publications, 1998.
- Tedesco, Frank M. “Social Engagement in South Korean Buddhism.” In *Action Dharma: New Studies in Engaged Buddhism*, eds. Christopher Queen, Charles Prebish and Damien Keown, 154-182. London: Routledge Curzon, 2003.
- Ueda, Noriyuki 上田紀行. *Ganbare Bukkyo: Otera runesance no jidai がんばれ仏教！お寺ルネサンスの時代*. NHK Books, 1004. Tokyo: Nihon Hoso Shuppan Kyokai, 2004.
- Watts, Jonathan S. “A Brief Overview of Buddhist NGOs in Japan,” *Japanese Journal of Religious Studies* 31/2 (2004): 417-428.
- Wratten, Darrel. “Engaged Buddhism in South Africa.” In *Engaged Buddhism in the West*, ed. Christopher S. Queen, 446-467. Boston: Wisdom Publications, 2000.
- Yamazaki, Ryumyo 山崎龍明. *Bukkyo no Saisei: Shinran Futai heno Michi 仏教の再生 — 親鸞・不退への道*. Tokyo: Daihorinkaku, 2001.
- Yarnall, Thomas Freeman. “Engaged Buddhism: New and Improved? Made in the USA of Asian Materials.” In *Action Dharma: New Studies in Engaged Buddhism*, eds. Christopher Queen, Charles Prebish and Damien Keown, 286-344. London: Routledge Curzon, 2003.

注

- 1 現在、「エンゲージド・ブディズム」という言葉と一緒に諸文献等で紹介される個人及び団体は世界に数多く存在するが、著名なものだけを紹介したい。

イギリス：The Friends of the Western Buddhist Order (FWBO), The New

Kadampa Movement (NKT), Soka Gakkai International-United Kingdom (SGI-UK)

南アフリカ：日本山妙法寺、インド仏教と中国仏教の活動

スリランカ：サルボダヤ運動 (Dr. A. T. Ariyaratne)

インド：The Trailokya Buddha Mahasangha, Sahayaka Gana (TBMSG, Dr. Ambedkarの教え)

チベット：ダライ・ラマ14世

タイ：The International Network of Engaged Buddhism (Sulak Sivaraksa)

台湾：Buddhist Compassion Relief Tzu Chi Foundation

韓国：The Buddhist Coalition for Economic Justice, The JungTo Society, The Buddhist Solidarity for Reform, The Indranet Life Community

オーストラリア：The Benevolent Organization for Development, Health, and Insight (BODHI)

アメリカ：The Buddhist Peace Fellowship (BPF)

- 2 Ken Jones, *The New Social Face of Buddhism: A Call to Action* (Boston: Wisdom Publications, 2003), p. 181.
- 3 Sallie B. King, *Being Benevolence: The Social Ethics of Engaged Buddhism* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2005). Gary Snyder, "Buddhism and the Possibilities of a Planetary Culture," in *Engaged Buddhism Buddhist Reader*, ed. Arnold Kotler (Berkeley: Parallax Press, 1996), 123-126.
- 4 Jones, *the New Social Face of Buddhism*, p. 181.
- 5 Thich Nhat Hanh はベトナムでVan Hanh University, An Quang Buddhist Pagoda, The School of Youth for Social Serviceの設立を他の僧侶の協力を得て、仏教平和教育の場を作った。
- 6 Thich Nhat Hanhはフランスにベトナム避難民、心を痛めた元軍人と仏教を中心とした共同生活をするPlum Villageという仏教に基づく村を作った。現在は、高齢であるが、キリスト教と仏教の対話や「エンゲージド

・ブッディズム」について世界の主要大学や寺院で講師をつとめ、数多くの書籍も出版している。

7 Thich Hhat Hanh, *Fragrant Palm Leaves*, 1966, p. 145.

例えば、ある日の晩、仏教のラジオ番組が予定されていたが、政府の圧力により放送が禁止された。これに対して、ラジオ局に多くの仏教信者が抗議のために集まった。政府は、すぐさま軍隊を送り、群衆の中に爆弾を投げ入れ、8人が死亡した。この事件の後、仏教僧侶および仏教信者はカトリック教会と共同して「信仰の自由」を要求し、ゴ・ディン・ジェム首相に被害者の責任を取るよう抗議したが、彼らは逮捕された。

8 この出来事に関しては、小説が存在する。宮内勝典『焼身』集英社 2005。

9 Thich Nhat Hanhは次のように述べている。「知識人や学生は仏教の階級制度に幻滅を隠せないでいる。2000年にも及ぶベトナム仏教は、南ベトナムとの戦争で苦しむ人々に導きの手すらださない。」 *ibid.*, 139。「長い間、私は人々の「苦しみ」に対応できる人本主義型仏教と仏教教団の必要性をベトナムで説いてきた。」 *ibid.*, 50.

10 ベトナム戦争時のベトナム民や僧侶の状況について、ティック・ナット・ハーンは一冊の本にまとめている。Thich Nhat Hanh, *Vietnam: Lotus in a Sea of Fire* (New York: Hill and Wang, Inc., 1967).

11 Thich Nhat Hanh, *Creating True Peace: Ending Violence in Yourself, Your Family, Your Community* (New York: Ree Press, 2003), p. 94. 「The Basic Ideal of Buddhist Youth for Social Service」というエッセイについては、*Vietnamese Buddhism* (Phat Giao Viet Nam) という雑誌に掲載されているようだが、筆者は未読。

12 Thich Nhat Hanh, *Creating True Peace: Ending Violence in Yourself, Your Family, Your Community*, p. 95.

- 13 Ibid., p. 94. 翻訳は筆者による。原文は以下の通り。尚、（）及び「」は筆者によって付け加えた。(以下、同じ)

From a very young age, I had a strong desire to put the Buddha's teaching into practice in order to improve the lives of the people around me, especially those of the poor peasants. Many monks, including myself, had a deep desire to bring Buddhism into every walk of life. For us, taking action according to the principles of what I called Engaged Buddhism—Right action based in compassion—was the answer.

- 14 Thich Nhat Hanh, *Being Peace* (Berkeley: Parallax Press, 1987), p. 53. 翻訳は筆者による。

原文は以下の通り。

“Engaged Buddhism does not only mean to use Buddhism to solve social and political, problems, protesting against bombs, and protesting against social injustice. First of all we have to bring Buddhism into our daily lives.”

- 15 Salie B. Kingは「Thich Nhat Hanhの最も根源的な社会活動思想は、自己内省の強調」であると考察している。Sallie B. King, “Thich Nhat Hanh and the Unified Church of Vietnam: Nondualism in Action,” in *Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movemnets in Asia*, eds. Queen and King, p. 342.

- 16 Kenneth Kraftは「エンゲージド・ブッディズムは、内なる作用と外への作用を含意している」と指摘する。また、「私たちは世界を変えなければならない、私たちは私たち自身を変えなければならない。そして、私たちは世界を変えるために、私たち自身を変えなければならない」と述べ、自己内省と慈悲心からの行動の双方の繋がり (Interrelatedness) の認識の重要性を主張している。Kenneth Kraft, *The Wheel of Engaged Buddhism: A New Map of the Path* (New York: Weatherhill, Inc., 1999), p. 10.

- 17 Thomas Freeman Yarnallによれば、伝統的解釈者として、Sulak Sivaraksa, Walpola Rahula, H. H. the Dalai Lama, Patricia Hunt-Perry, Lyn Fine, Robert

Thurmanなどが挙げられ、モダンの解釈者としては、Robert Aitken, Nelson Foster, Ken Jones, Kenneth Kraft, Christopher Queen, Gary Snyder, Judith Simmer-Brownなどが挙げられる。Thomas Freeman Yamall, “Engaged Buddhism: New and Improved? Made in the USA of Asian Materials,” in Queen, Prebish, and Keown, eds., *Action Dharma: New Studies in Engaged Buddhism*, pp. 286-287.

18 Christopher S. Queenは「エンゲージド・ブuddiズムは相互依存性、慈悲、方便、勤行、瞑想、集団活動、正命など、すべてではないにしても様々な過去の要素やテクニックを多く受け継いでいる。しかし、同時に、仏教にはあってはならないような人々を苦しめてしまう社会的不平等、社会悪、政治的圧力などという伝統も受け継いでいる」と述べている。Christopher S. Queen, “Introduction: A New Buddhism,” In Queen, *Engaged Buddhism in the West*, p. 25. また、アジア仏教とその国それぞれの政治との関係についてはIan Harris, ed., *Buddhism and Politics in Twentieth-Century Asia* (London and New York: Continuum, 1999). を参照されたい。この本には、ミャンマー、カンボジア、インド、日本、韓国、ラオス、スリランカ、タイ、チベット、ベトナムにおける仏教と政治の関係について書かれおり、仏教がいかにして肯定的または否定的な社会/政治活動に従事してきたのかが説明されている。

19 Yamall., pp. 302-303.

20 Kenneth Kraft, “Engaged Buddhism,” in Arnold Kotler, ed., *Engaged Buddhist Reader* (Berkeley: Parallax Press, 1996)., p. 65.

21 このような状況に対して、「エンゲージド・ブuddiズム」に「慈悲道経」(Path of Compassion Sutra) や「相互依存宣言」(Declaration of Interdependence) というような名前の経典を作成してはどうかという研究者もいる。Kenneth Kraft, “Wellsprings of Engaged Buddhism,” in Susan Moon, ed., *Not Turning Away: The Practice of Engaged Buddhism* (Boston: Shambhala

Publications, Inc., 2004), p. 160. また、Christopher S. Queen は「エンゲージド・ブッディズム」を現在存在する3つの仏教宗派(大乘仏教、上座部仏教、密教)に加えて4番目の宗派として定義づけてはどうかという議論をしている。Christopher S. Queen, “Introduction: A New Buddhism,” in Christopher S. Queen, ed., *Engaged Buddhism in the West*, pp. 1-31.

22 King, *Being Benevolence: The Social Ethics of Engaged Buddhism*, pp. 4-5.